

下総町名木廃寺跡確認調査報告



昭和 58 年 3 月

千葉県教育委員会

序

千葉県下には、国分寺跡をはじめ40数か所にのぼる古代寺院跡の所在が確認されています。これらの寺院跡は、奈良・平安時代における地域の歴史・文化を解明する上で重要な遺跡であります。発掘調査により内容を把握し得た例は数少ない状況です。

千葉県教育委員会では、県内に所在する古代寺院跡の中で、特に重要性が高くかつ開発の影響を受ける恐れのあるものについて、規模、時代等を明らかにして、その保存策を講ずる資料とする目的で、国庫補助事業として昭和55年度から実態確認調査を実施してきました。

本年度は、下総町名木に所在する名木庵寺跡の調査を実施しました。当庵寺跡からは、以前に軒丸瓦(三重圈縁八葉單弁蓮華文)、小金銅仏、墨書き土器等が発見されており、龍角寺や龍正院との関連を考える上で重要視されていました。今回の調査では、粘土積みの基壇跡が確認され、また、竪穴住居跡や掘立柱跡も検出されていることから、規模や時代を把握することができました。この成果によって、重要な資料と課題を提供し得るものと考えております。

このたび、その発掘成果が調査概報として刊行される運びとなりました。この報告書が学術的な資料としてはもとより、文化財の保護、活用のために広く一般の方々にも利用されることを期待しております。

終わりに、調査に当たって、多大なご協力をいただいた下総町教育委員会と土地所有者の皆様、下総町文化財審議会会长内藤武義氏をはじめとする地元の方々、調査を担当された財団法人千葉県文化財センターの職員の方々の御苦労に対し、心から感謝の意を表します。

昭和58年3月31日

千葉県教育庁文化課長

斎藤 浩

例　　言

1. 本書は、千葉県教育委員会が実施した古代寺院跡確認調査の第3年次の報告である。
2. 名木廃寺跡は、千葉県香取郡下総町名木字鎌部に所在する。
3. 調査は、国庫補助金を得て、千葉県教育委員会が財団法人千葉県文化財センターに委託して実施した。
4. 調査は、昭和58年1月8日から2月12日にかけて実施した。
5. 現地における調査と報告書の作成は、財団法人千葉県文化財センター研究部長補佐沼沢豊が行ったが、千葉県文化財センター矢戸三男、今泉潔、岸本雅人の助力を得るところが大きかった。
6. 調査の実施にあたっては、下総町名木字鎌部633 遠藤文雄氏の所有地を借用させていただくとともに、多大の御援助をたまわった。録して感謝の意を表するものである。
7. 調査の実施にあたっては、下記の機関に多くの御協力をたまわった。

下総町教育委員会・千葉県立房総風土記の丘・千葉県立大利根博物館

8. 本書をまとめるにあたり、下記の方々より種々の御教示、御高配をたまわった。感謝申し上げる。
内藤武義・五代吉彦・栗本佳弘・高木博彦・安藤鴻基・宮本敬一・深沢克友・豊田佳伸・荻悦久・山路直充・網伸也

目 次

I	はじめに	1
II	調査経過	6
III	検出遺構	9
IV	出土遺物	16
V	まとめ	23

図版目次

図版 1 遺跡 1 遺跡全景

2 発掘区全景

3 基壇部発掘状況

図版 2 遺跡 1 基壇断面 (A₁ - A₂)

2 基壇断面 (A₂ - A₃)

3 基壇断面 (B₀ - B₁)

図版 3 遺跡 1 基壇断面 (C - C')

2 基壇下土壤 (P₂, P₃)

3 基壇下土壤 (P₅, P₆)

図版 4 遺跡 1 基壇下 3 号住居址と土壤 (P₁)

2 基壇脇住居址 (1 号, 2 号)

3 基壇北方の溝

図版 5 遺物 1 鐘瓦 2 男瓦 3 ~ 5 女瓦 参考資料

図版 6 遺物 1 緑釉陶器片 2 ~ 9 土師器及び須恵器 10 鉄釘

図版 7 遺物 既応の出土遺物

図版 8 遺物 墨書文字の赤外線写真

挿図目次

第1図	名木庵寺跡の位置図(1/50,000).....	3
第2図	名木庵寺跡周辺の地形図(1/5,000).....	4
第3図	トレンチ配置状況及び遺構検出状況全体図(1/1,000)	7
第4図	基壇検出状況図(1/200)	10
第5図	基壇土層断面図(1) (1/50)	12
第6図	基壇土層断面図(2) (1/50)	13
第7図	1, 2号住居址平面図(1/60).....	14
第8図	名木庵寺跡出土古瓦拓影(1/4)	17
第9図	下総町滑川、龍正院採集の古瓦拓影(1/4)	18
第10図	名木庵寺跡出土土器実測図(1/3)	20
第11図	名木庵寺跡採集の綠釉陶片(1/2)	21
第12図	名木庵寺跡出土鉄釘実測図(1/3)	22

I はじめに

1. 遺跡の位置と環境

名木廃寺跡（以下本廃寺跡と記す）は、千葉県香取郡下総町名木字鎌部 663-3 及び 663-4 番地に所在する。

下総町は香取郡の西端に位置し、西を成田市、南を香取郡大栄町、東を香取郡神崎町と接し、北は利根川をはさんで茨城県と接している（第1図及び中トピラ口絵参照）。

下総町は昭和30年2月、旧滑河村、小御門村、高岡村が合併して成立した。名木地区は旧小御門村に含まれる。名木は古くは「南城」とも記されたようであり、香取古文書にはしばしば「南城、上坊」と併書されて登場するという。^{註1)} 上坊は名木地区の隣村である神崎町植房であろう。

名木地区は下総町の東辺部に所在する。大字の名木はかなり広い地域の名称であり、名木の中心集落から本廃寺跡までは直線で1.5kmほどもある。本廃寺跡の周辺は小字鎌部であり、すでに遺跡名が定着しているため改称すべきではないが、名木廃寺跡という呼称には多少適格を欠くところがある。なお、鎌部という地名は、廃寺跡付近に所在する製鉄遺跡（第2図）との関連から成立した疑いがあると私考している。^{註2)}

下総町の町域はほとんど北総台地で占められており、北辺がわずかに利根川本流沿いの沖積低地となっている。本廃寺跡は標高38m程度の台地平坦面上に所在しているが、周辺には、同様の台地上に多くの原始、古代の遺跡が所在している。それらは、下総町教育委員会による綿密な分布調査報告としてまとめられている。発掘された遺跡はまだあまり多くないが、重要な調査例もあり、それらについては越川敏夫、江尻和正両氏によってまとめられている。^{註3)}^{註4)}

下総町において注目される遺跡は、なんといっても大和田に所在する一群の玉作集落であろう。これらは地元の研究室内藤武義、飯島治通両氏の熱意によって発見されたものであり、寺村光晴氏による正式調査の結果、古墳時代前期

にさかのばる東国有数の玉作遺跡と判明した。^{註5)}この地域には古墳時代の石枕が最も多く分布することが知られており、これらは千葉県における古墳文化のひとつ地殻性を代表する事象と認められ、注目される。

名木地区の北西、字高の大日山古墳は全長54mの前方後円墳で、木炭桟を内部主体とする前期古墳で、短冊形鉄斧などを副葬していた。前記町教委による分布地図によれば、町域内に160余基の古墳が所在するとされており、前方後円墳もかなり含まれている。本庵寺跡にも古墳の残滓が2か所認められている(第3図)。調査された古墳としては他に名木字木挽崎の木挽崎古墳群がある。

奈良・平安時代の遺跡としては、滑川の龍正院及び龍正院瓦窯を、本庵寺跡との関連で見のがすことができない。

滑河山龍正院は承和7年(840年)の開創と伝わり、文龜年間(1501~1504年)再建の仁王門(重要文化財)、元禄11年(1698年)再建の本堂(県指定有形文化財)が現存する。また、坂東33靈場の第28番札所として信仰が厚く、滑河觀音^{註7)}として知られる名刹である。寺地は利根川に近い低地にあるが、境内からは布目瓦が出土する。第9図に示す鎧瓦は、本堂の裏で内藤武義氏が採集されたものである。^{註8)}印旛郡栄町龍角寺所用瓦と酷似する、大和山田寺系の古瓦と認められる優品であるが、後に見るように本庵寺跡出土と伝わる鎧瓦と同范である疑いが濃く、注目される。このほか、三重弧文字瓦や下總國分寺所用瓦に酷似する宝相華文鎧瓦も採集されており、考古学的には本寺が7世紀末頃に創建され、8世紀後半頃まで存続したことが推定される。

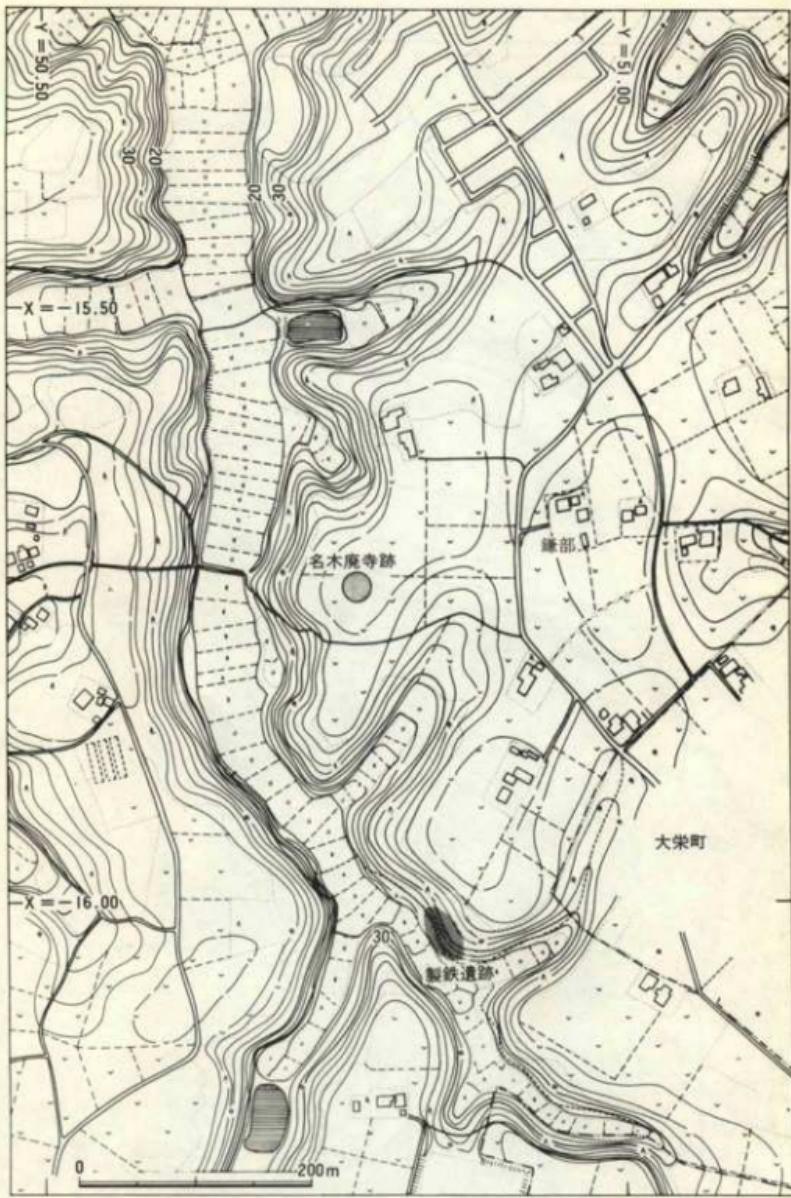
龍正院瓦窯跡は本堂の南東200m程の台地斜面にある。昭和56年に立正大学考古学研究室が調査を行い、窯3基が検出された。^{註9)}1号窯では山田寺系鎧瓦とともに、やや時期の下降するとみられる均正唐草文字瓦が出土した。3号窯では宝相華文字瓦が出土した。調査者は1号窯→2号窯→3号窯の順に操業されたと考えておられる。

龍正院1号窯における均正唐草文字瓦と山田寺系鎧瓦の伴出という事実は興味深い。操業時期は新しい方の遺物でおさえるべきであるから、山田寺系鎧瓦の範がかなり長く用いられ続けたと考えてよい。このようにみると、先に記し



第1図 名木庵寺跡の位置図(1/50,000)

—この地図は国土地理院発行の5万分の1地形図(佐原)を使用したものである—



第2図 名木庵寺跡周辺の地形図(1/5,000) 一 座標系: 第IX系, 等高線間隔 2 m,
昭和48年千葉県都市部計画課作成の「下総町地形図 8」に掲げる

た龍正院の創建時期の推定も、心もとないものとなってくる。本廃寺跡の調査結果には十分留意する必要があり、本廃寺跡の時期決定にも影響するものといえる。なお、1号窯の均正唐草文字瓦は、8世紀以降の所産とみられるが、その正確な時期は今のところわからない。

以上のほかには、布目瓦を出土する遺跡は下総町では知られていない。

2. 研究史

本廃寺跡の存在について、地元ではかなり古く知られていたかもしれないが、考古学的文献で紹介されたのは比較的近年になってからである。その初見は、^{註10)}昭和42年刊行の『全国遺跡地図(千葉県)』においてであろうか。同書に「名木鎌部遺跡」とあるのが、本廃寺を示す。その後、昭和43年に千葉県下の古代寺院の集成を行った安藤鴻基氏は、「名木廃寺」の名称で一覧表に掲載しておられる。^{註11)}

昭和53年には千葉県立房総風土記の丘で企画展「房総の古瓦」が行われ、県内111か所の古瓦出土地が集成された。その折、担当の高木博彦氏の努力により、他県へ流出していた本廃寺跡出土鎧瓦(第8図1)の探索が行われ、同展において公開されるとともに、同展終了後風土記の丘に寄贈され現在常設展示されるにいたったことは、よろこばしい限りである。^{註12)}

なお、註7で記したように、同展の図録10ページに名木廃寺跡の出土として図示される鎧瓦は、実は龍正院出土品(第9図の瓦と同一物)であるが、卷末の編年表では、これを西暦700年の位置に置き、下総では龍角寺に次ぐ古い年代を付与しておられる。^{註13)}

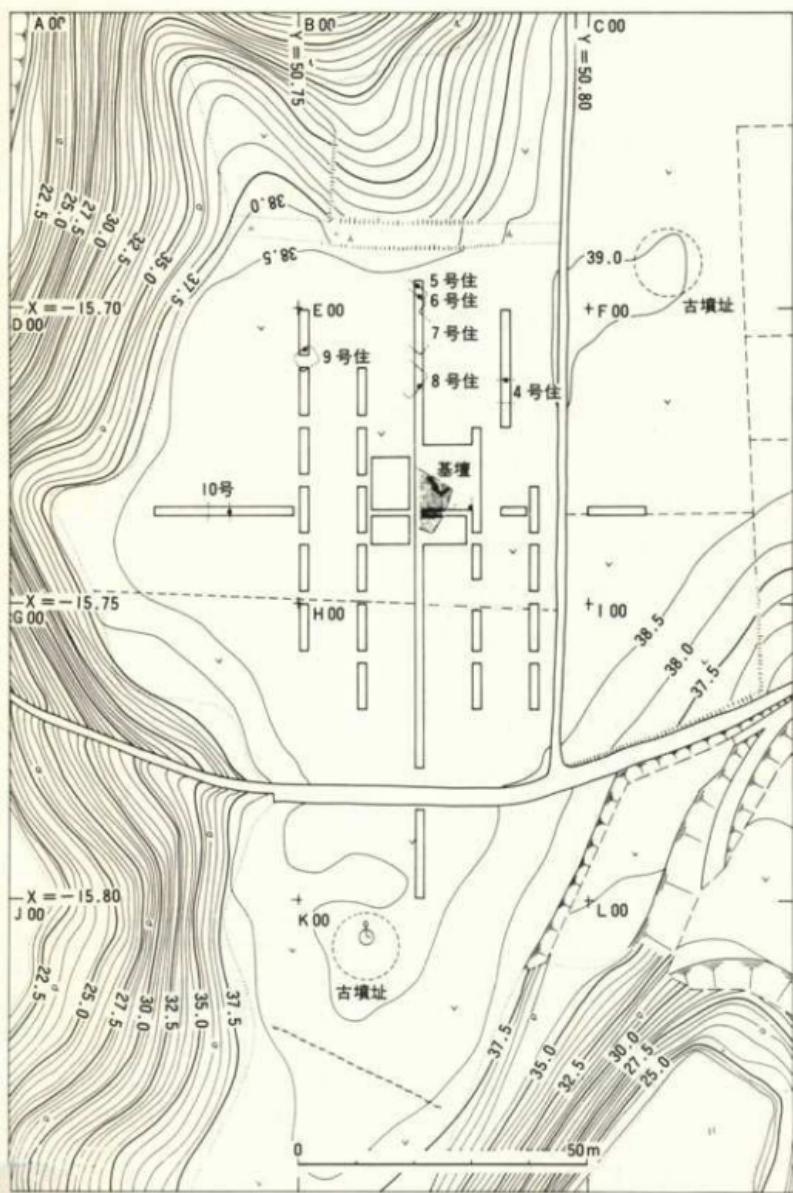
本廃寺跡では小形仏像が2体出土しており、地元の成毛守氏が所蔵しておられる。^{註14)}昭和57年秋に埼玉県立博物館で行われた特別展「古代東国の大豪」に2体とも展示されている。図録では銅造如来形坐像及び銅造菩薩形立像とされ、後者は「8~9世紀」と比定されている。本廃寺跡の性格を考えるうえで重要な資料といえよう。なお、本廃寺跡の南方1kmほどの大栄町三和でも、高さ16cmほどの十一面觀音像2体が出土しており、平野元三郎氏によれば唐様式をそのまま伝えるとされ、あわせて注目すべき遺品であるといえよう。^{註15)}

II 調査経過

1. 調査の経過

今回の調査は昭和58年1月8日から同年2月12日にかけて実施された。昭和57年度もおしつまつての調査着手であり、このためその後の報告書刊行作業をきわめて厳しい日程の中で行わなければならなかつたが、これは本廃寺跡の現況が畠地で、上作物の収穫が前年12月までおわらなかつたためである。ちょうど、第3図に見られる基壇中央部の長い南北トレンチを境いとして、東側にはサツマイモ、西側にはゴボウが作られ、そのとり入れを待つて調査に着手したものである。なお、今回のゴボウのとり入れに、トレンチャーでない機械が使用されたため、後にも見るように基壇の西半分が破壊されてしまったことは残念であった。

測量業者による地形測量と基準点測量を事前にを行い、1月8日からクイ打ちを開始、1月10日から発掘に着手した。現況で畠中央部が径15m程の範囲で若干盛り上がっているのが視認され、地主の遠藤氏の話では、かつてゴボウを掘った時、その部分で機械が動かなくなつた由であり、基壇であろうことはほぼ推察された。そこで、まず初めにその部分にあたるE44, 64, 84の3トレンチを設定し表土を除去したところ、E64トレンチで白っぽい砂質の土層があらわれ、基壇であることが確実となつた。この部分の表土は10cm程と非常にうすかった。山砂の厚さは5cm程しかなく、基壇中央部にしか残つていなかつた。周辺部ではより下部の基壇築成土が最上層となつてゐたが、周辺部の土層は全体に軟弱で、トレンチ内では基壇範囲が画定できなかつた。このため周辺をかなり広く拡張することとし、他の基壇探索のためのトレンチ発掘と併行して作業を行つた。他のトレンチでは、カマドをもつ住居址は多数検出されたが、2基目の基壇は検出されなかつた。トレンチの設定が必ずしも十二分に行われたとは言えないが、地主の遠藤氏の話でも、長年の耕作の間異常の感じられた個所はないとのことであり、本来基壇が1基しかなかつたと認めてよいであろう。



第3図 トレンチ配置状況及び遺構検出状況全体図(1/1,000)

基壇範囲拡張中E74グリッドなどで、表土中から鉄釘がかなり出土したのは、建物との関連で注意されるが、瓦はほとんど検出されなかった。表面採集でも小破片をいくつかひろうのがやっとであったが、かなり広く発掘したにもかかわらず良好な資料を得られなかつたのは残念であった。遠藤氏が耕作をはじめた頃にも瓦は少なかつた由であり、本来瓦の使用量は少なかつたと認めるべきであり、建築の構造を推定する根拠とすべきであろう。

拡張は終了したが、平面でいくら観察しても基壇のプランは確認できなかつた。このため基壇中央部を残して、十字にサブトレントを設け、基壇を切断して断面で限界をおさえることとした。すでに見たように、中央部の上二層だけは非常に堅緻であったが、その以下の層は軟弱で、掘りこみがローム層まで達していないこともあり、地山と基壇築成土の境界画定はきわめて困難であった。しかも、拡張区中央より西側は耕作により基壇がまったく遺存していないことが判明し、基壇平面プランの確認はいっそう困難なものとなつた。

正確なプランを確認するためにはなるべく多くの個所で境界をおさえる必要があった。そこで、基壇の遺存する東半部にサブトレントを追加した。この結果、第4図に見られるようなプランが画定された。予想以上に方位の振れが大きかったため、サブトレントによって建物コーナー部を切断してしまつていてることが後にわかつた。通常、真北に対する東西の振れは10度未満程度であり、この建物の方向性は意外なものであった。

上記サブトレントを多数設定したことにより、基壇下の遺構を検出するという予期しない成果があつた。

2月にはいり、図面作成と埋めもどし作業にかかり、2月12日全作業を終了した。

2. 調査の方法

50m四方の大区を設け、各大区は右図のように100の小区に分け、地点の表示とした。なお、本遺跡の当センターにおけるコード番号は341-001とした。
註18)

A区									
A 00	A 01	A 02	A 03	A 04	A 05	A 06	A 07	A 08	A 09
A 10			A 22 トレント		A 24 トレント				
A 20									
A 30									
A 40			A 42 トレント						
A 50					A 55				
A 60						A 66			
A 70							A 77		
A 80								A 88	
A 90									A 99

III 検出遺構

1. 基壇

基壇は1基だけ確認された。遺存度はきわめて悪く、西半分はまったく破壊されていた。遺存した東半部も、第5図、第6図に見ることなく、ゴボウ掘りとりのためのトレンチャーにより搅乱をうけていた。

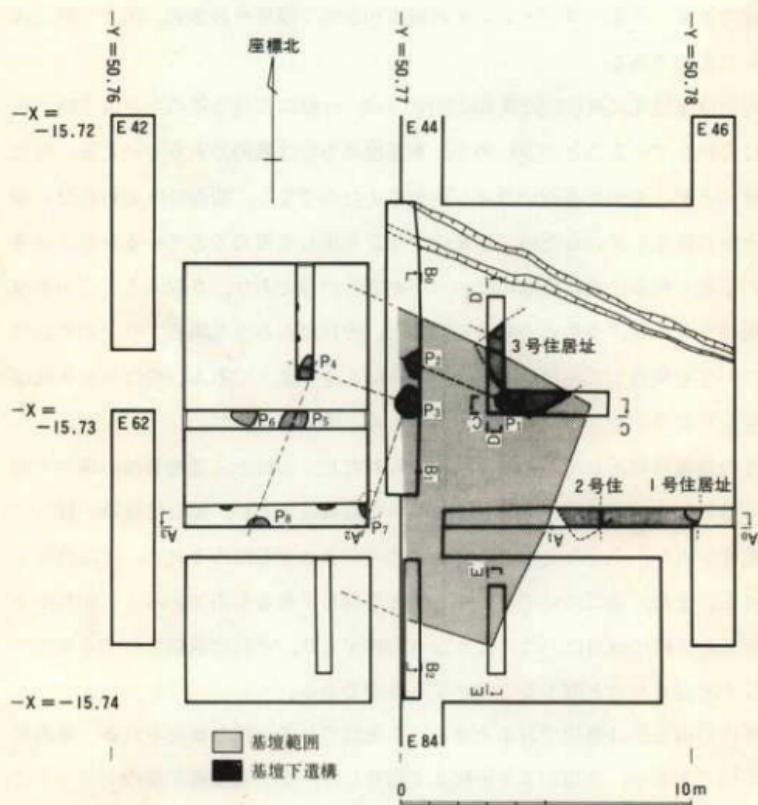
平面規模 すでに述べたように、本基壇の平面プランは平面観察によっては把握できず、6本のサブトレンチの断面10か所で限界をおさえ、図上で推定復元したものである。

方向は座標北に対し約22度東に振れている。一般に古代寺院の向きは当時の磁北に合致していることが多いので、本基壇の方位は異例であるといえる。何度も述べるが、平面で各辺のラインをおさえたのではなく、断面にあらわれた10個の点から推定しているため、本来のプランを正しく復元できているかどうか多少の不安も残る。他に建物のない一字かぎりの寺であり、さ程大きくなき基壇の規模などから、多角式の堂舎を想定し、それにみあう基壇のプランの可能性についても検討してみたが、その可能性はうすいようである。やはり第4図に推定したプランが、最も妥当性の高いものと考えておきたい。

その補強材料として、基壇下に認められたピット群と、基壇背後の溝の方向性に着目したい。基壇下のピットについては後述するが、掘立柱建物の柱穴の可能性があり、そうだとするとその建物の向きは本基壇のそれと、ほぼ合致している。また、溝についても、本基壇と平行して走るものであることがわかる。本基壇造営時の地目に、このような方向性があり、それに規制されて本基壇の方位が決定されたと解することができる。

基壇の南北長は東辺でおよそ9m、中央部で9.5m程と推定される。東西長は不明であるが、北辺が7.5m程まで遺存している。基壇西半部のグリッドには、基壇築成土の一部である白色砂質土や固い黒色土を混じえた搅乱土が認められた。この部分の搅乱は調査の直前に行われたものなので、これらの土層の

分布範囲からある程度基壇の西限を推測することができる。これらの土層は、第4図P₅とP₆の位置くらいまでは認められた。東辺からP₅までだと9.5m、P₆までだと11m程となる。前者をとればほぼ正方形の基壇、後者をとれば東西に若干長い長方形の基壇となる。攪乱の際、機械の走行方向の左右に、掘りとられた土が拡散することを考えれば、前者の推定値をとる方が妥当であるかもしれない。いずれにしろ、正方形に近い小規模な基壇であったことは間違いないなかろう。



第4図 基壇検出状況図(1/200) -A～Eは土層断面図ポイント-

断面所見 本基壇の断面は6本のトレンチで観察した。

断面図A₀—A₃（第5図）に東西の断面を示した。A₁—A₂の間の基壇が最も良好遺存した部分である。掘りこみ基壇と認められるが、切りこみはゆるい傾斜で行われている。厚さは35cm程で、上部は耕作によりかなり削平されているものと思われる。最上層の砂質土層と、その下の黒色土層だけ堅緻であり、それ以下の層は砂質土やロームブロック土を混入するが、すべて軟弱であり、基壇築成土とは認め難いほどである。

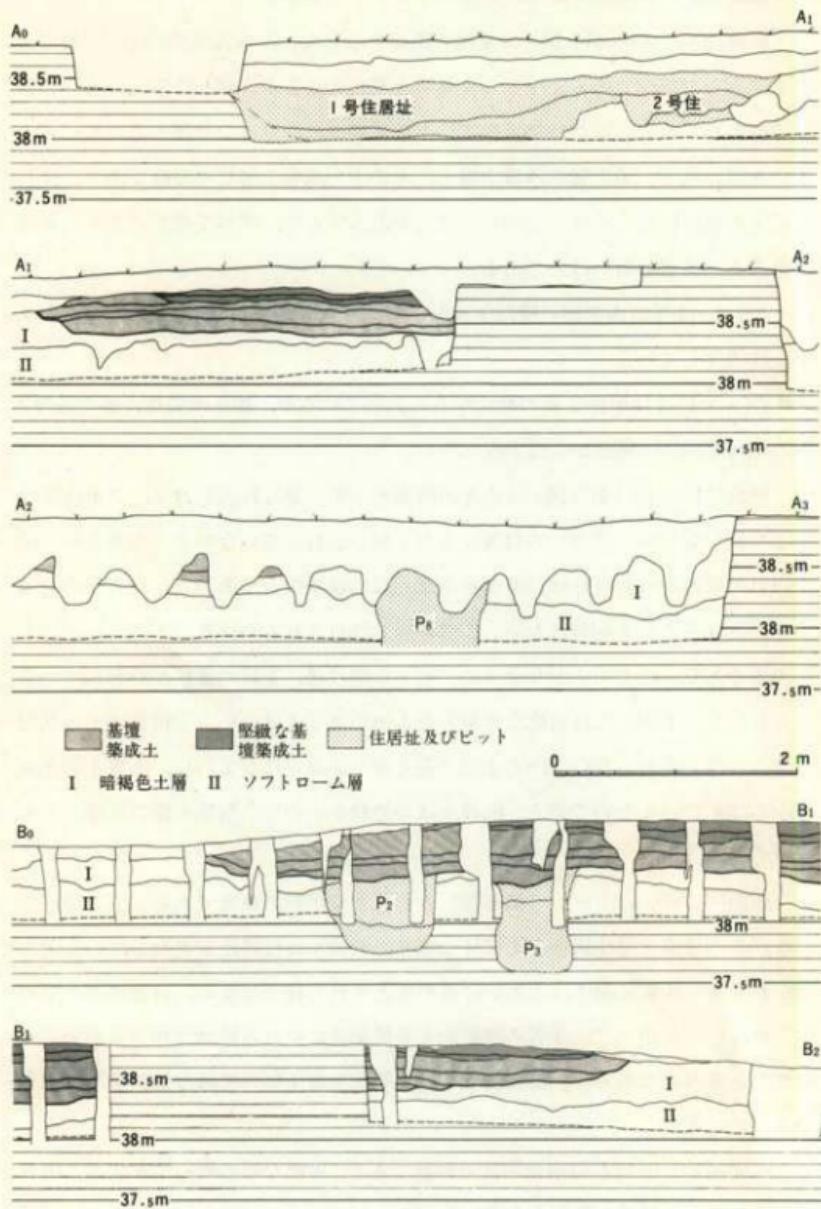
A₂—A₃は基壇西半部の擾乱状況を示す。基壇築成土かとみられる土層がわずかに遺存している。

A₀—A₁には住居址2軒の断面があらわされているが、相互の先後、また基壇との先後関係は、断面からはわからない。

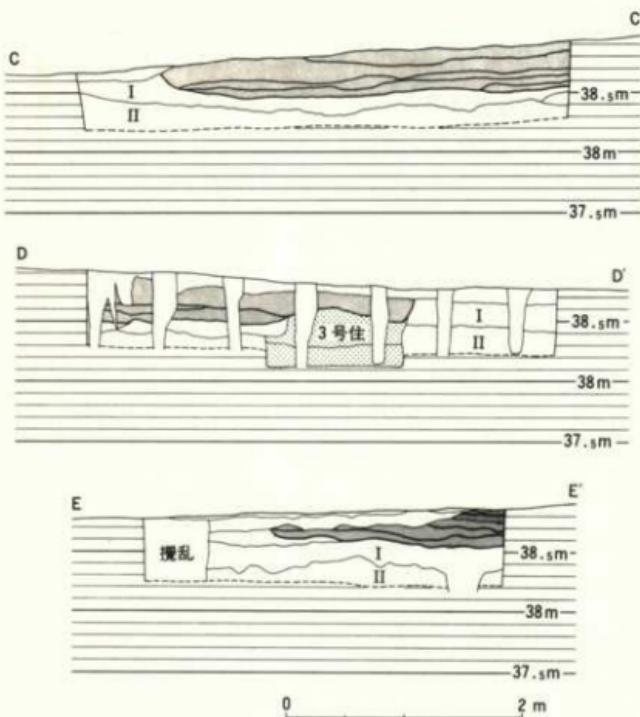
断面図B₀—B₂（第5図）に南北の断面を示す。見られるとおり、ゴボウ掘りとり穴が著しい。ゴボウの収穫はまだ1回しか行っていないようであるが、2回目の収穫が行われれば、基壇東半部もほぼ壊滅するであろう。何らかの対策が施されることを期待したい。この断面で注目されるのは基壇下のピットとの関係であり、図で明らかのように、ピット埋没後、基壇の築成が行われている。なお、ピット内の土は自然に堆積したもののようにはない。基壇築成土の状況はここでも変わらない。P₃の上部で最も厚く50cmをはかるのは、P₃覆土の上面がくほんでいるためである。P₃覆土はやや軟かいので、版築の際に沈降したものであろう。

断面図C—C'、D—D'（第6図）は基壇北東隅部の断面である。ここで注意されるのは第3号住居址との関係であり、明らかに住居址が先行していることがわかる。住居址覆土は人為的に埋めもどされた様子ではなく、自然埋没と認められる。したがって、住居の廃絶から基壇築成にいたる時間は相当長期であったと見るべきであろう。この部分では、築成土最上層の堅緻な層はすでに削平されている。

断面図E—E'は基壇南東隅部の断面である。堅緻な層の周辺部がすでに削りとられている様子が観察される。



第5図 基壇土層断面図(1) (1/50)



第6図 基壇土層断面図(2) (1/50)

基壇下部の築成土は、白色砂質土やロームブロック土を若干混入するとはい、全体には地山である暗褐色土（I）とよく似た性情を示していた。このため、基壇と地山との境界の認定に苦慮したわけであるが、基壇の掘りこみが浅く、ローム層まで達していないための結果なのであろう。

なお、B₀-B₁の間で、基壇築成土中より土師器杯（第10図7）が出土している。遺存度のよくない破片であり、偶然の混入品と思われるが、本基壇築造時の上限を画す資料となるものであり、重要である。

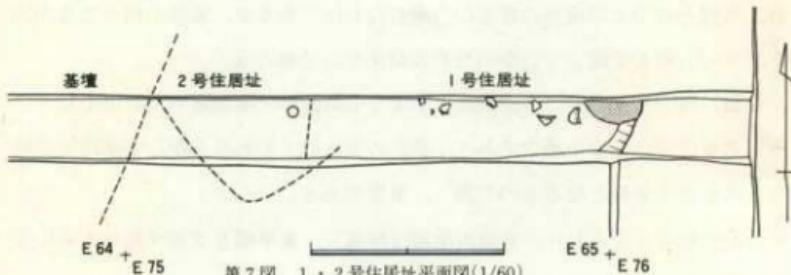
以上に見られるとおり、基壇西半部は壊滅し、東半部もゴボウ掘りとりによる擾乱が甚しい。早急な保存策が切望される。

2. 基壇下の遺構

住居址 基壇東半部の下には2軒の竪穴住居址（2, 3号）があり、特に3号址との時間関係についてはすでに述べたとおりである。第7図に見るように2号住居址も完全に基壇と重複している。1号住居址は基壇範囲の外にあるが至近の位置にあり、基壇との同時併存は考えにくい。1号址出土土器の様相は、2, 3号址のものにくらべ若干新しいものの、それほど時間差の認められないものであり、本址も基壇に先行して存在した可能性が高い。2号址では、底面に「信」の墨書のある完形の杯（第10図1）が出土しており、3号址では燈明皿に用いられた杯（第10図3）が出土している。いずれも、8世紀代の所産と推定される。第10図4の甕は1号址カマドの前面で出土したものであり、床面からかなり浮いた位置にあったが、これもさ程時期の下降しないものと言えよう。第10図2は1号址、2号址いずれに帰属していたか判然としない。

これらの住居址の存在は、寺院建立以前の当地における有力集落の存在を示し、墨書土器や燈明皿の存在は開明的知識階層の存在を物語っているとみられよう。小なりとはいえ、旧都下に数少ない古代寺院を創建するに足る素地は十分にあったわけである。

1号住居址は東にカマドをもち、一辺3.3m程の竪穴である。2号住居址の規模は不明であるが、床面はかなり堅緻のようである。3号住居址は南西向きの辺のややコーナー寄りにカマドをもつ、一辺3mほどの規模を示す。3号址はP₁と重複するが、P₁の覆土を切ってカマドが構築されている。



第7図 1・2号住居址平面図(1/60)

ピット 基壇西半部の下で多数のピットが検出された。

細いサブトレンチ内での検出であり、またその存在に気づいたのが調査の終わり近くになってからであったため、十分その性格を究めるまでに至らなかつたのが残念である。

ピットは埋土のちがいによって2種に分けられる。ひとつは径2~3cmのロームブロック土が主体の埋土をもつもので、P₁とP₂がそれである。ピットの平面形は隅丸方形で、長径70~80cmほどである。深さはP₂が60cm、P₁は未発掘で不明である。埋土の状態は、掘りあげた土をそのまま埋めもどしたものである。観察が不十分で柱痕は確認できなかったが、ピットの平面形や埋土の状態から、これらが掘立柱建物の柱穴である公算は大きい。P₁、P₂を結んだ線が基壇の方向に一致することも注意すべきである。P₁、P₂の心心間の距離は3.5mをはかる。

もうひとつはP₃~P₈までの6個で、この他サブトレンチにわずかにかかった不確実なもの若干がある。これらも平面隅丸方形を呈するが、長径80~90cmとやや大きく、埋土は細かいローム土粒を含む暗褐色土が主体である。深さもP₃が80cmと深い。発掘したのはP₃だけであり、基壇切断の過程で検出したものであるため柱痕の有無は確認していない。P₃、P₄の心心距離は約3.6m、P₄、P₈のそれは約5.7mである。第4図に見るように、P₃~P₄、P₄~P₈の心を結んだ線は基壇の方向に一致する。これはまた、P₁~P₂の方向ともほぼ等しい。

3. その他の遺構

基壇背後の溝は、東へ向かうにつれ幅、深さとも減する。出土遺物は土師器、須恵器の小片若干で、古瓦片は一点も認められなかった。建物倒壊時までには埋没していたものであろう。基壇と溝が平行している点が注意される。

基壇外のトレンチでは住居址7軒が確認された（第3図）。トレンチにかからなかった住居址の多さがしのばれる。出土土器の様相は、総じて基壇下住居址より数十年程新しいと認められる。基壇の周囲に所在するこれらの住居居住者たちの時代に、寺院は維持されたのではないかと筆者は考えている。

7号址では墨書き器片と須恵器片利用の硯2点が検出されている。

IV 出 土 遺 物

1. 瓦

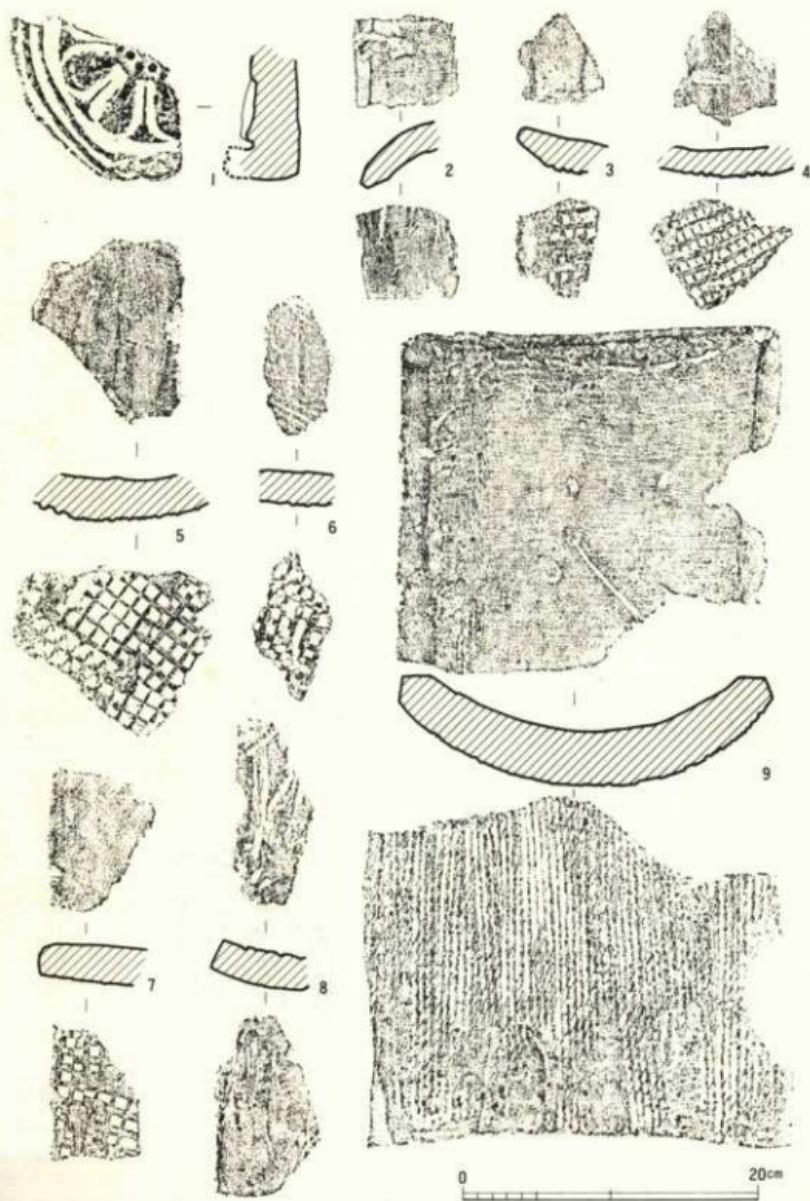
今回の調査で検出された古瓦片はきわめて少ない。いずれも数センチ角程度の小片で、男瓦片49点、女瓦片27点がそのすべてである。遺構に伴って検出されたものではなく、すべて表土中出土ないしは表採品である。軒先瓦はまったく認められなかった。

第8図1の鎧瓦は地主の遠藤氏の採集品であり、その来歴についてはすでに触れた。9の女瓦大片も遠藤氏の採集品で、鎧瓦と同じ斜面の畠地内で見出されたものの由である。それにしても、軒先瓦やこのような大きな破片がかつて出土したことが信じ難いほど、今回の出土品の内容は貧弱なものであった。

以下、瓦の記述は今泉潔によるものである。

軒丸瓦 これまでに1点だけ採集されていた単弁8葉の軒丸瓦である。全体に文様のシャープさに欠けるのは、粘土を范に入れる打込みが弱かったせいである。外区には3重の圓線がめぐる。一番外側の圓線は、范に入れる粘土が小さ目だったために、全周しない。圓線の山の一部をヘラケズリしていてその部分の断面は台形になっている。ばってりした蓮弁の弁端は少し反り返り、中には中房からのびる方形の子葉をおく。間弁は中房に達する、細長いものである。

この軒丸瓦は広い意味での「山田寺式」軒丸瓦といわれるものだが、下総では印旛郡栄町龍角寺ではじめてあらわれる。^{註19)} 龍角寺式軒丸瓦は県内で1つのまとまりをなし、上総・下総にまたがって9か所ほどの遺跡で確認されている。それらのなかで本庵寺跡のものにもっとも近いのが、第9図の龍正院出土の軒丸瓦である。瓦当文様は同范といつてもいいくらい酷似する。3重の圓線の山部をやはり部分的にヘラケズリし、本例と同じような技術がみられる。丸瓦部は欠失しているが、その痕跡から瓦当裏面に刺突状のキズをつけただけで丸瓦を直接接合している。本庵寺跡のものもおそらく同じような方法と思われる。^{註20)} こうした接合方法はすでに龍角寺の2種類の軒丸瓦でも確認されている。



第8図 名木庵寺跡出土古瓦拓影(1/4)

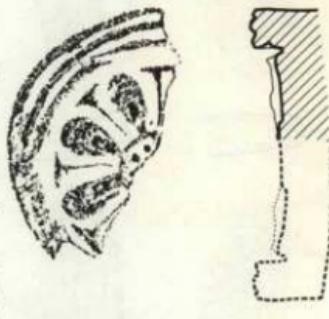
瓦当文様とともに技術の一端も受けつがれていったのであろう。ただこの接合法では、接着力が弱く、技術的には稚拙である。

本庵寺では、龍角寺式軒丸瓦に伴う重弧文軒平瓦はまだ出土していない。

丸瓦 全容のわかるものはまだ1点も出土していない。龍角寺式軒丸瓦には行基丸瓦が伴うようなので、本庵寺跡のものもそのように考えてよいだらう。出土したものは小破片ばかりだが、側面の調整のしかたにはおよそ3種類ある。第8図2は側面を3回面取りし、凹面側を巾広く削り取るのを特徴とする。ほかに面取りが1回のものと2回のものがある。それから2点ほど端部の凹面を端縁と平行にヘラケズリしたものがあった。凸面はいずれもナデ調整である。

平瓦 第2次成形の痕跡から3種類に大別できる。出土量のもっとも多いのが正格子叩き目である(第8図3~7)。凹面をたてにヘラケズリして、布目・糸切り痕・枠板痕を消してしまったものが多い。5は既出資料で房総風土記の丘保管品である。6は凹面に枠板痕と布目が残る。8は凸面に叩き目のないナデ調整である。9は地元の遠藤氏によって採集、保管されていた、かなり大型の破片である。広端部が遺存する。凸面は巾5cm以上の板に繩を巻きつけた叩き板を使って、図でいえば左から右へ叩き締めている。側面・端面は2回ヘラケズリ、側面の凹面側は巾広く削り落す。凹面に端縁と平行の糸切り痕と細かい布目が残り、広端縁近くには布の端もあらわれている。

平瓦の断面をみると、粘土が密着していなかったために生じた、不整合な線が多くみられた。粘土塊(タタラ)の作りかたが不十分だったようである。これらの平瓦のうち正格子叩き目的一群がさきの軒丸瓦に伴う。成形技法の痕跡を明らかにとどめたものはなかったが、まず桶巻作りと考えてよいだらう。9は布のよれかたや側面の調整のしかたから、一枚作りと思われる。これは正格子叩き目のものよりかなり年代的にくだり、8世紀後葉以降に位置づけられる。



第9図 下總町滑川龍正院採集の
古瓦拓影(1/4)

2. 土器

第10図に示した土器は7をのぞいてすべて住居址に伴うものである。1～4は基壇下の1～3号住居址に伴うものであり、住居址の年代を示すとともに、住居址埋没後に構築された基壇の上限を画す資料となるものであり、重要である。7は基壇築成土中で出土したもので、これも基壇の時期をおさえる資料となり得る。以上のはかは、基壇の周辺に分布する住居址よりの出土品である。

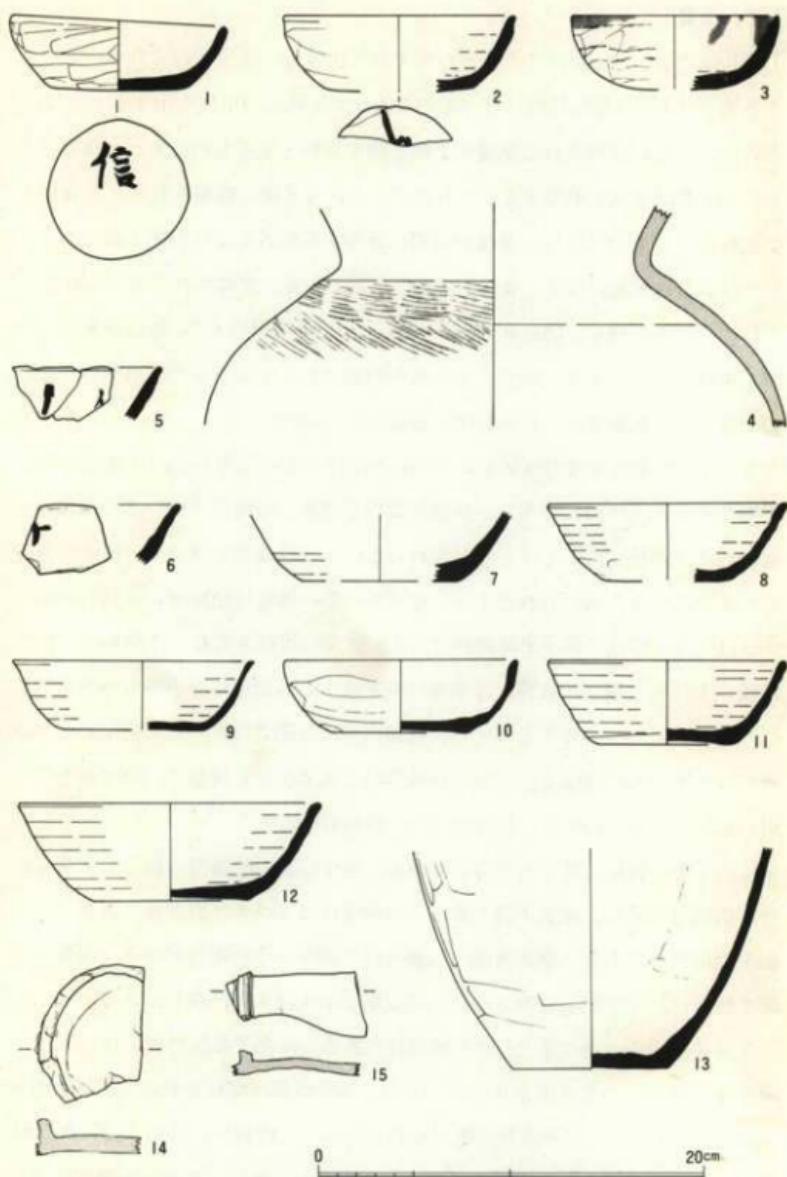
1は2号住居址に伴う、まったくの完形品である。土師器杯であり、底面に「信」の墨書が残る(図版8-1)。総じて厚い器壁をもち、体部外面及び底面を手持ちヘラケズリで調整する。体部内面にわずかにヨコナデ痕が残り、その上をナデで調整する。口径11cm、器高3.2～3.8cm。

2は1号住居址か2号住居址のどちらかに伴うものであるが、正確な帰属は不明である。土師器杯である。体部 $\frac{1}{3}$ 周程を遺存。底面に「中」(?)の墨書の一部が残る。調整法は1とほとんど変わらない。口縁端部がヨコナデにより外方へわずかにつまみあげられたようになっている。推定口径12cm、器高3.4cm。

3は3号住居址に伴う土師器杯である。体部 $\frac{2}{3}$ 周程を遺存。体部外面に粘土帶積み上げ痕を残し、底面には木葉圧痕を残す。外面全体を手持ちヘラケズリし、わずかにヘラミガキを加える。体部内面には顕著にヨコナデ痕が残る。内底面はナデ。体部内面と、外面は口縁端部にススが厚く付着し、燈明皿として用いられたことがわかる。口径10.6cm、器高3.6cm。

4は1号住居址に伴う須恵器壺である。胎土に長石や雲母の粒などを多く含む。灰褐色を呈し、焼成不良である。口頸部にはヨコナデ痕が顕著(ロクロ回転を利用?)であり、胴部外面には横方向の細かい平行叩目が残る。内面はナデで仕上げ、アテ具痕は残らない。推定胴部最大径30.5cm程をはかる。

7は基壇築成土中で出土した土師器杯である。体部下半 $\frac{1}{3}$ 周程が残るだけで、遺存度は悪い。かなり大ぶりの杯である。体部外面は回転を利用したヘラ削りで調整されるが、ロクロ水挽き痕は認められない。内面は、底面まで回転を利用したナデ痕が残る。外底面の調整法はよくわからない。内面は加熱を受け、ススの付着が目立つので、燈明皿として用いられたものと認められる。



第10図 名木庵寺跡出土土器実測図(1/3)

以上が基壇の上限を画す材料となる土器である。1～3の土器の諸特徴は、
註21) 山田水谷遺跡における土師器杯の分類の第1群に相当するものと認められ、8世紀前半～中葉頃の所産と判断される。3は、1, 2より古式の様相をとどめるが、近い時期の所産とみておきたい。4の須恵器甕も、これらと併出しておかしいものではない。基壇築土中出土の7は、技法からみて1～3より後出するものと認められる。ただし、ロクロ水挽き痕は認められていないのでさ程下降するものとは思われない。全体にぶ厚い器壁をもつなど古拙であり、ここでは8世紀中葉頃に比定しておきたいと思う。

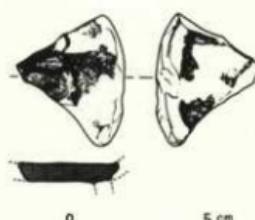
8～12は基壇と関係しない住居址から出土した土師器杯である。これらの住居址は確認だけで、内部を掘り下げていないので、出土遺物はすべて覆土上部にあったものと言える。11, 12はかなり良く残っているが、他は遺存度の悪いものである。8号住居址出土の10が、1～3同様の古式を示すが、他の杯はロクロ水挽き痕を顕著に示す、1段階新しい時期の所産と認められる。底面の調整は、8, 9が手持ちヘラケズリ、10は回転ヘラ切りの後周縁を手持ち(?)ヘラケズリ、11は回転糸切りの後周辺を回転ヘラケズリしている。10をのぞいて、8世紀後半から9世紀前半頃の所産と認められる。

14, 15はともに須恵器甕の底面の、高台に囲まれた中を硯に利用したものである。どちらも灰黒色に固く焼きしまった精良な土器である。

14, 15と5は7号住居址出土で、12もこの住居址に伴う可能性がある。8は5号、9, 10は8号、6, 11は9号、13は10号住居址の出土である。

3. 緑釉陶片

基壇付近の畠中で表面採取したものである。甕ないし皿の破片で、内底面に陰刻花文が見られる。釉は所々剥落している。色調はやや黄味を帯びた淡い緑色である。胎土は固い須恵質でなく、三彩陶器のそれのごとく白色で軟かい。混入物は少なく精良である。9世紀後半以降、10世紀前半頃までの所産であろう。
註22)



第11図 名木庵寺跡採集の
緑釉陶片(1/2)

4. 墨書土器その他

本庵寺跡（周辺集落を含む）出土土器の中に、墨書土器が含まれている率がきわめて高く注目される。今回の出土品では第8図に示すもののほか、図版8の2～5などが主なものであるが、他にも判読できない、細片に墨痕のついた程度のものはかなり多く認められる。

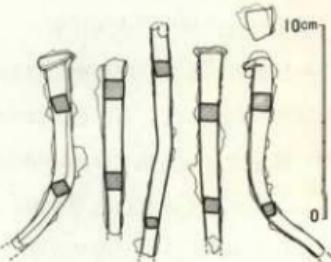
図版7に示した墨書土器もすべて本庵寺跡で出土したものである。地主の遠藤氏が長年の耕作の間に採集されたもので、図版7の1～8は現在大利根博物館に展示されているもの、9、10は遠藤氏が所蔵しておられるものである。10は墨書土器でないが、つまみのとれた後、天井部内面を硯として用いている須恵器杯蓋であり、同様当時の文筆生活をしのばせる遺物である。

図版7の1は体部外面と内底面に「度寺」と読める墨書がある。字体、筆勢が異なり、別人の手になるものかもしれない。2は字画がはっきりしているか何という字かわからない。3は体部内外面に同一人の手になる「万」と記す。4は「中」か。5は「廿」で、反対側の体部外面に「福」かと思われる文字が割れ口に残っている（図版8-11）。6は「亘」であろう。「反」かと見られる文字も別固体に認められる（図版8-14）。7、8、9は「中」で、「中」と「廿」は本庵寺跡に多い文字である。

これだけ多数の墨書土器や転用硯が存することは、寺跡の存在ともあわせて本遺跡の性格を有弁に物語るものと言える。開明的知識階層の存在を意味するだけでなく、通有の集落と異なる、遺跡の特殊性をも認めるべきかも知れない。

図版7に示す土器は、いずれも8世紀後半から9世紀前半頃の所産であろう。詳細は別の機会に発表したい。

第12図に基壇部分表土中出土の鉄釘を示す。基壇上の建物に使われていたものに間違いなかろう。現存最大長12cm、太さは上部で1.2cm程の角釘で、頭部が折りかえされている。図示したもののほか、小片が1点出土している。



第12図 名本庵寺跡出土鉄釘実測図(1/3)

V ま と め

検出された基壇は1基だけであり、規模も小さいものであった。他に基壇の存する公算は少なく、本来1字のみで構成される寺であったと認められる。

基壇は1辺9~9.5m程の正方形、ないし東西に若干長い方形を呈していたと思われるが、西半部が破壊されており正確なところはわからない。いずれにしろ、上部の建物も小規模なものであったと認められる。考えうる構造としては、多角堂の如きものか、唐招提寺校倉のような寄棟造りの小堂舎、あるいは海竜王寺西金堂の如き切妻屋根の建築などが想起されるが、調査の所見からは推測する手がかりがない。基壇築成土は全体に軟弱であり、重量のある建築を支えられるものであったか疑問も残る。瓦の出土量はきわめて僅少であったので、屋根全体に瓦を葺いた建物ではなかった公算も大きい。そうであれば、基壇築成における手ぬきとも思える状況も、不自然なものではない。

本寺の創立時期については、1点だけ検出されている山田寺式鎧瓦の年代観でおさえると7世紀の末頃と認めざるを得ない。しかし、基壇下の住居址出土土器の年代は8世紀前半よりさかのばらないものようであり、矛盾が生じる。住居址との先後関係から見るかぎり、基壇の築成時期は8世紀中葉より以降、その後半代にあると考えるのが自然である。

それでは山田寺式鎧瓦の存在をどのように解すべきであろう。まず想起されるのは、基壇下で検出されたピット群である。これらがたしかに掘立柱建物の柱穴であるなら、その建物と山田寺式鎧瓦を結びつけることは可能である。ピットのひとつは3号住居址より先行することが判明しており、7世紀後半に位置づけることは可能である。ただ、サブトレーニングで基壇を切断した際の所見では、基壇下の土層中にはまったく瓦片は認められておらず、この点で先の想定の妥当性にやや疑問を感じるのである。

山田寺式鎧瓦の年代を下げて考えることも可能である。その根拠は、I章で述べた龍正院瓦窯跡における、山田寺式鎧瓦と均正唐草文字瓦との共伴という

事実である。正式報告書に換るものでないため慎重を期したいが、先にも述べたように山田寺式鎧瓦の製作がかなり後代まで存続したと解し得るのであるまい。そのようであれば、8世紀後半頃築造の本寺と山田寺式鎧瓦の結びつきも、理解しやすくなると言えよう。

ところで下総町滑川、龍正院は3基の瓦窯址を伴うことからもわかるように、かなりの大寺であったものと思われる。Ⅲ章で示したように、龍正院の山田寺式鎧瓦は印旛郡栄町龍角寺の同式鎧瓦を最も近い祖形とするものであり、両寺の密接な関連（少なくとも瓦工人を通じた）がうかがわれる。同時に、龍正院と名木庵寺跡出土の山田寺式鎧瓦は、同范であることにほぼ間違いない、両寺の関係についても着目する必要がある。

龍正院がかなりの大寺であったらしいことからみて、名木庵寺はその末寺の如き関係にあったと解せようか。そのようであれば、龍正院所用瓦の供給が受けられたものであり、また残余ないし中古の瓦を供与されたものであれば、時間的にさらにおくれて本庵寺の堂舎が飾られることになったものであろう。

なお龍正院と本庵寺跡の間は直線で4.5km程である。

本庵寺跡における山田寺式鎧瓦の意義に関する2説を述べたが、ここでは後者により妥当性を認めておきたいと考える。

基壇下および周辺の住居址で、多数の墨書き土器が検出されたことも成果のひとつとしてあげられる。既出資料も含めると、内容は一層多彩である。「度寺」という、寺院と関係するかもしれない墨書きもあり注目される。寺院建立以前から、開明的知識階層が広汎に存在したこと認めるべきであり、その後も長くその状態は続いたものようである。須恵器転用品ながら、硯も3点出土している。縁釉陶器片も出土しており、この集落が通有の寒村でなく、地域における中心的な位置を占めるものであったこと、そしてそのようであればこそ、小なりとはいえ仏寺を建立し得た背景になっていることが理解できるのである。

最後に、基壇はすでに半壊の状態であり、遺存した部分も2~3年のうちに耕作により湮滅するおそれがある。周辺の集落も重要なものであり、これ以上の損壊はなんとしても防ぎたい。適切な対策が講ぜられることを切望する。

註

- 1 千葉県立中央図書館編『千葉県地名変遷総覧』147頁 昭47
- 2 調査中、地元の成毛守氏より鉄滓の出る場所がある旨教示をうけ、案内していただきて確認した。位置は第2図に示すとおり、本廃寺跡至近にある。台地斜面の裾部にあって、農業用水路工事によって断面が露出したものである。ほぼ東西20mにわたって、厚さ30~40cmの鉄滓の層が断続して続き、途中2か所に赤く焼けたスサ入り粘土が認められた。おそらく製鉄炉の一部であろう。立地は当センターで調査した製鉄遺跡である成田市御幸畑遺跡にきわめて良く似ている。成毛守氏によれば、別の谷筋であるが近くにもう1か所、鉄滓の出る場所があるという。また砂鉄の露頭も近くにあるというが、これらは確認していない。

今回の調査区でも鉄滓が出土しており、基壇付近ではかなりの鉄釘も検出されている。本寺建立に際し操業されはじめたものかどうかはわからないが、本寺および周囲の集落と密接に関係する遺跡であるとみるとべきではなかろうか。

なお、鎌部の鎌は釜に通じ、たたら製鉄の存在に由来すると解したい。

- 3 下總町教育委員会編『千葉県香取郡下總町埋蔵文化財分布地図』1~18頁 昭56
- 4 越川敏夫・江尻和正「下總町で発掘された遺跡」『史談しもふさ』第3号 4~14頁 昭57
- 5 寺村光晴他『下總国の玉作遺跡』1~178頁 昭49
- 6 沼沢豊「千葉県の石枕」『房総風土記の丘年報』3 34~43頁 昭55
- 7 岩堀角次郎他『千葉県香取郡誌』417~418頁 大10
千葉県教育委員会編『千葉県の文化財』16, 41頁 昭55
- 8 現在千葉県立大利根博物館に展示されている。なお、昭和53年に行われた千葉県立房総風土記の丘企画展「房総の古瓦」の展示図録10頁に、名木廃寺跡出土として図示された鏡瓦は、第9図の内藤氏採集、大利根博物館展示中の龍正院鏡瓦と同一物である。図録の誤りであることは、同展の責任者高木博彦氏にも確認した。御注意願いたい。
- 9 野村幸希他「下總龍正院瓦窯跡の調査(予報)」『(立正大学)考古学研究室彙報』第22号 33~39頁 昭57
- 10 地主の遠藤文雄氏が土地を入手したのは昭和29年頃というが、内藤武義氏の記憶によれば昭和20年代前半には開墾されていたという。その頃、一人ではかえきれない程の石がいくつかあった由であるが、礎石であったのか、付近にあった古墳の石棺材の類であるのか判然としない。なお、遠藤氏が耕作をはじめられた頃も、瓦片は多くなかったということである。

- 11 文化財保護協会編『全国遺跡地図（千葉県）——史跡・名勝・天然記念物及び埋蔵文化財包藏地所在地地図——』昭42
- 12 安藤鴻基「千葉県上代寺院址一覧」『金鈴』20 23-24頁 昭43
- 13 第8図1の本庵寺跡出土鎧瓦は、地主の遠藤文雄氏が、基壇の北70m程の、畑となっている斜面で耕作中に見出されたものである。その後、遠藤氏方へ毎年行商に来ていた富山の薬販売人に乞われるまま与えてしまった由であるが、昭和53年の「房総の古瓦」展開催の折、担当の高木博彦氏の尽力により、行方を探索し返却してもらったものであるという。
- 14 千葉県立房総風土記の丘編『企画展房総の古瓦』昭53
- 15 2体の小仏像は、基壇の南75mにある古墳残渾とみられる低いマウンド付近で、耕作中、別々の機会に見出されたものという。
- 16 埼玉県立博物館編『特別展古代東国の大豪——仏教文化の夜明けをさぐる——』65, 78頁 昭57
- ✓17 平野元三郎「千葉県上代仏教文化史資料録」『千葉県の歴史』4 5頁 昭47
- 18 出土遺物等の地点の表示は、遺跡コード、遺構（グリッド）番号及び遺物番号の組みあわせで行っている。341-001, B88, 0001（遺構ごとの検出順の遺物番号）などのように表記し、遺物への注記もこのように行っている。
- 19 飛鳥資料館『山田寺展』昭56, 及び前掲書註14(今泉註)。
- 20 奈良国立博物館編『縮刷版飛鳥白鳳の古瓦』昭57, に掲載されている龍角寺の軒丸瓦は、瓦当裏面に弧状の溝を切って丸瓦を接合したものである(今泉註)。
- 21 松村恵司「出土土器の分類と編年」『山田水呑遺跡』昭52 775-809頁
- 22 吉田恵二「縁釉陶と灰釉陶との相関関係とその編年について」『考古学ジャーナル』No.211 35-40頁 昭57



1 遺跡全景（東から）

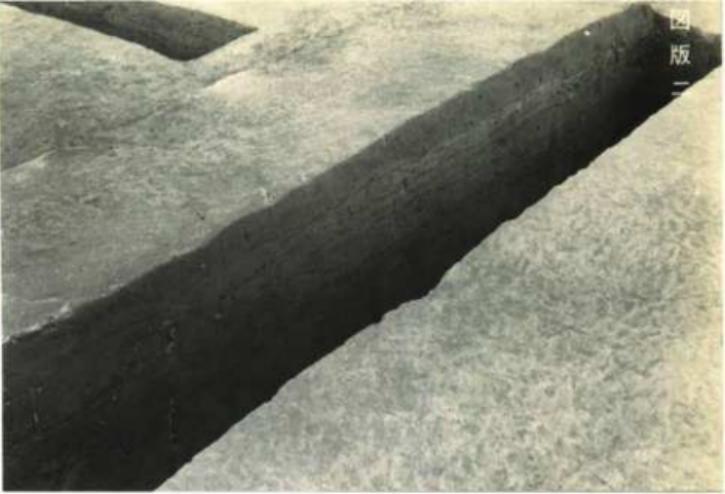


2 発掘区全景（南から）

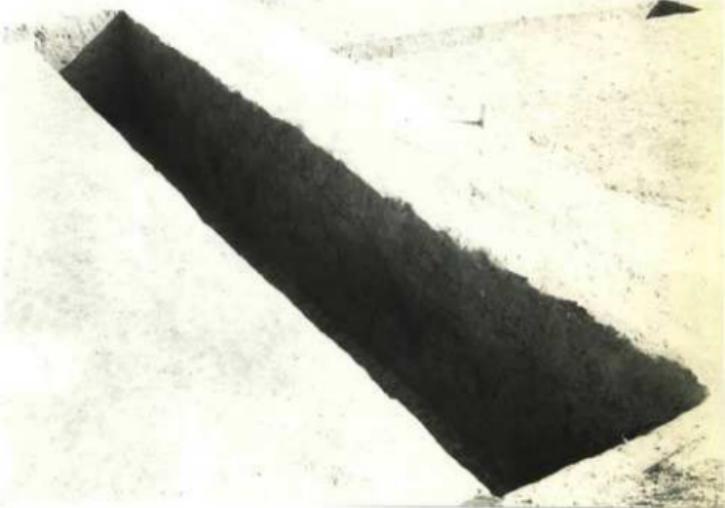


3 基壇部発掘状況（南から）

1 基壇断面
(A₁—A₂、北東から)



2 基壇断面
(A₂—A₃、北西から)



3 基壇断面
(B₆—B₁、南西から)



1 基壇断面
(C-C'、北東から)



2 基壇下土壤
(P₂手前、P₃、北から)



3 基壇下土壤
(P₅手前、P₆、東から)



1 基壇下3号住居址と土壤
(P1、東から)



2 基壇脇住居址
(1号手前、2号、東から)



3 基壇北方の溝（南から）





〔参考資料〕



2



4



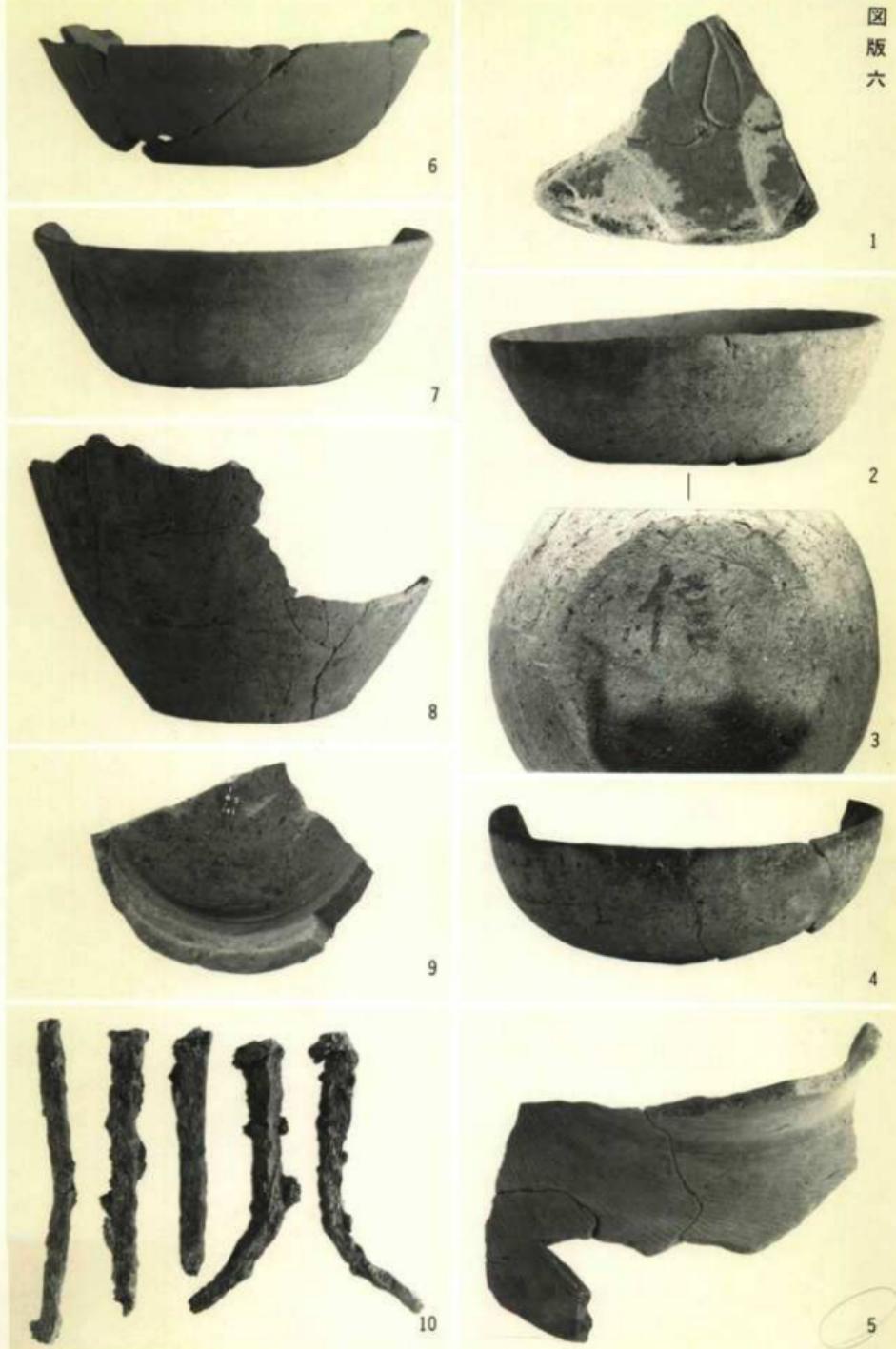
3



5

遺物 1 鐘瓦 2 男瓦 3~5 女瓦

〔参考資料〕下総町滑川龍正院出土鐘瓦



遺物

1 緑釉陶器片（表採品） 2-3 墨書のある土師器杯（2号住） 4 灯明皿に用いられた土師器杯（3号住） 5 須恵器甕（1号住） 6 土師器杯（7号住） 7 土師器杯（9号住）
8 土師器甕（10号住） 9 観に用いられた須恵器片（7号住） 10 鉄釘（基壇部表土中）



5



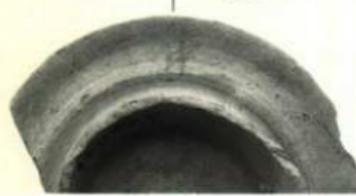
6



1



1



7



2



8



3



9



4

遺物 既応の出土遺物 (1~9 墨書のある土師器)

10 研に使用された痕のある須恵器杯蓋)



遺物

墨書文字の赤外線写真（略現寸大、撮影 杉原 豊）

6~17 既応の出土品

1~5 今調査による出土品

下総町名木庵寺跡確認調査報告

昭和58年3月31日発行

発行者 千葉県教育委員会

編集者 財團法人 千葉県文化財センター
千葉市亥鼻1丁目3番13号
電話 千葉(0472)25-6478

印刷所 有限会社 正文社
千葉市都町2丁目5番5号
電話 千葉(0472)33-2235

